

氏名	長尾 智絵
学位の種類	博士（学術）
学位記の番号	甲第 197 号
学位授与年月日	2017（平成 29）年 3 月 20 日
学位授与の条件	学位規則第 4 条第 1 項該当
学位論文題目	「きくこと」と「つくること」の相関を視座とする一宮道子の音楽教育実践 -歴史的・音楽分析的手法による-
論文審査委員	主査 坪能由紀子（人間発達学専攻 教授） 副査 岡本 吉生（人間発達学専攻 教授） 副査 吉澤 一弥（人間発達学専攻 教授） 副査 安田 寛（奈良教育大学名誉教授）

論文の内容の要旨

本稿は一宮道子（1897-1970）という、自分自身でも音楽をつくり続けた音楽教育者の生涯にわたる実践を通時的・歴史的的手法および共時的・音楽的手法によって分析することを通して、子どもが自ら音楽をつくるという活動に「きくこと」と「つくること」とがどのように関係しているのか、そこからひるがえって一宮道子の生涯の音楽教育実践から読み取れる意味とは何かを明らかにすることを目的としたものである。

一宮道子は、日本女子大学、武蔵野高等女学校、日本女子大学附属豊明小学校、日本女子大学附属豊明幼稚園などの教師であっただけでなく、小学校の音楽教科書や、その指導書、そして遊戯集などの著者、たくさんの子どもの歌の作曲家、さらには子どものためのピアノ教則本であるバイエルピアノ教則本の編集者として、幅広い活動を展開した。

一宮が編集したバイエルピアノ教則本は戦後長い間改訂を重ねたし、「おべんとう」と「おかえりのうた」は今でも一日の保育活動には欠かせない歌となっている。これだけ広い分野で活躍し、その社会的影響力も決して小さいとは言えない音楽教育者を他に何人思い浮かべることができるだろうか。

しかし、一宮道子は決して多くの研究者の関心を集めるような音楽教育者ではない。事実、筆者が研究をはじめたまで一宮について書かれた論文 1 点のみであった。卒業論文にまでひろげてみてもあと 1 点増えるだけであった。しかも 2 点とも一宮が勤めた日本女子大学の関係者である。1 人はその教員であり、1 人は卒業生である。したがって 2 点とも、日本女子大学史の一環として位置付けられる研究であ

ることを否認しない。その一方で、一宮は全く無名の人物とも言い切れない。たしかに、『日本音楽教育事典』には立項されていないが、『日本女性人名辞典』『昭和物故人名録（昭和元年-54年）』『文化人名録』等には立項されている。

では、一宮道子は音楽に関心がある研究者が取り上げる必要性を見出せないような音楽教育者なのだろうか。そうではなく、「きくこと」と「つくること」との相関を常に視野においた彼女の独自の音楽教育展開には、今日の時代にとっても必要な普遍的な成果が残されているのではないか。そうだとしたら、それは明らかにされる必要がある。

目的と方法によって、本研究の構成は2つに分かれる。

1. 第1章から第4章までが、子どもたちに即興的に音楽づくりをさせる音楽教育実践に至る一宮道子の音楽教育者としての生涯の実践を発掘し考察した章である。
2. 第5章から第6章までが、豊明幼稚園の子どもたちの「つくりうた」のつくり方の分析とその結果の考察をおこなった章である。

第1章で武蔵野高等女学校での「絶対音感教育」実践に至るまでの一宮の経歴について述べ、特にこれまで触れられていない詩人、深尾須磨子、声楽家、荻野綾子との交流について明らかにし、彼女たちの音楽に対する思想が「絶対音感教育」と並んで一宮の音楽教育実践に大きな影響を与えていることに言及した。

第2章では武蔵野高等女学校で一宮が実践した「絶対音感教育」を扱い、それに至る歴史的背景、実践の内容とその評価、実践が及ぼしたその後の影響について解明した。

第3章では豊明幼稚園で一宮が実践した絶対音感教育を扱い、その内容を詳しく分析し、その過程で明らかになった、今日多くの幼稚園で実践されている天野式リトミックで有名で、また日本女子大学附属豊明小学校で一宮と同僚であった天野蝶とのこれまで知られていなかった共同実践について明らかにした。

日本の音楽教育と同じく、絶対音感教育が一宮道子に与えた影響は決定的で、生涯にわたって彼女の音楽教育実践のバックボーンとして影響が残ってゆく。その一方で絶対音感教育を絶対視する考えからしだいに脱却して、戦後、一宮は豊明幼稚園で独自の音楽教育実践を展開し始める。その実践は4つに区分することができる。1つ目は、音感・リズム感指導である。2つ目は園生活環境による音感リズム感教育で、3つ目は、幼児の即興創作指導である。そしてこの3つの実践は4つ目の幼児による劇あそびに統合される。

そこで第4章でこの4つの実践について述べ、一宮がどのような考えで実践を行ったのかに着目しつつ実践の内容を解明した。

第5章では幼児の自発的な歌についての先行研究と即興的音楽づくりについて

の先行研究に依拠して「つくりうた」のつくり方を分析するための手法を考案した。

第 6 章ではその手法に従って豊明幼稚園児の「つくりうた」を分析し、考察した。

終章では、彼女の実践の歴史的経緯と「つくりうた」の分析結果から明らかになった、本稿の 2 つの目的に対する結論を提示した。

1. 一宮の最後の実践となる子どもが自ら音楽をつくるという活動は、「音」を「きくこと」と「つくること」との相関で成り立っている。
2. 一宮が生涯をかけて追求したのはまさにこの相関であり、これからも、音楽教育の対象となる「音」がどう変わっても、この相関を常に音楽教育の視座に据えるということの重要性は変わらないことを一宮の生涯にわたる実践とその成果がしめしている。

最後に、この 2 つの結論が示唆する新たな課題について述べた。

論文審査結果の要旨

〈論文概要〉

一宮道子(1897～1970)は、日本女子大学、附属豊明小学校、附属豊明幼稚園で音楽教師として教鞭を取り、また作曲家としても「おべんとう」「おかえりのうた」等の子どものうた、日本女子大学の校歌や「成瀬先生誕生日のうた」等、本学ゆかりのうたを残している。バイエルピアノ教則本や小学校の音楽教科書の編集にも関わり、絶対音感教育の推進者としても知られていた。

彼女の音楽教育の内容は時代に連れて変遷するが、その根底には常に「きくこと」があり、それは彼女が生涯追い求め続けた「つくること」と大きな関係を持っていた。

本論文は一宮の音楽教育者としての生涯と業績をたどりつつ、彼女の音楽教育における「きくこと」と「つくること」がどのような関わりを持っているのかを読み解き、その後、豊明幼稚園のこどもたちの「つくりうた」をもとにした「創作劇」(音楽劇)中のうたの構造を分析したものである。これらを通して、一宮の音楽教育者としての特質を把握し、彼女の日本の音楽教育史における位置付けと音楽教育に与えた影響を考察した。

〈論文の構成〉

本論文は 264 ペーから成り、序章、終章を含んで全 8 章で構成されている。

序章では本研究の背景、研究方法と目的について述べる。

第1章では一宮道子の前半生をたどり、京都での少女時代、日本女子大学校での成瀬仁蔵との出会いや、東京音楽学校時代、女学校教員時代での業績や、彼女に影響を与えた音楽や人々との交流を書いた。

第2章では、一宮の教育に大きな影響を与えた「絶対音感教育」との出会いについて書いた。園田清秀の日本における絶対音感教育の最初の導入、笈田光吉によるその普及、そしてその一宮との関わりについてである。一宮は高等学校（武蔵野女子高等学校）ではじめて「絶対音感教育」を行った人であった。しかし笈田のそれとは異なり、絶対音感を実際の演奏（合唱）に取り入れ、音感教育がどのように音楽的能力を高めるかを実践で示したのであった。

第3章では豊明幼稚園における戦前の活動、音をきくことと動きとを連動させた活動について述べている。そこでは豊明小学校同僚天野蝶との出会いが大きな意味を持っていた。

その豊明幼稚園における戦後の発展を述べたのが第4章である。音感・リズム感指導からはじまり、「歌をつくる活動」、そして昭和42年頃の「劇をつくる活動」まで、子どもたちの園生活における音楽や歌の存在、そしてそこに彼女が果たした役割が明らかになっている。

一宮の活動を園の教員として支えたのが細矢静子であった。彼女は子どもたちのつくった歌を詳細に分析した論文を、お茶の水女子大学から発行されている雑誌「幼児と教育」に連載している。第5章では細矢の論文を紹介し、記譜された子どもたちの作品、及びその分析を通して、豊明の子どもたちが実際にどのような音楽をつくっていたのかを明らかにした。

第6章では、同じ子どもたちの歌の楽譜、その他の資料をもとに、筆者が独自の音楽分析を行った。それによって、豊明の子どもたちの歌の独自性ととも、子どもものうたがどのような特徴を持っているのかその時代を超えた共通性、そして子どもものうたの分析のためにどのような方法が有効なのかが明らかになった。

終章では、こうした一宮の実践が音楽教育に持つ意味を考察した。一つは「きくこと」を絶対音感から身のまわりの様々な音までに広げたこと、もう一つは「きくこと」と「つくること」の子どもにとっての相関性を実践的に分析した点である。「きくこと」によって子どもは音楽的な刺激を受け、音楽文化を吸収して育っていくのであり、その育ちを反映したものが子どもにとっての「つくること」すなわち「つくりうた」なのだと考えられる。

〈審査委員会の見解〉

- 1 資料の発掘と整理を綿密に行い、それをもとに一宮道子の業績が再評価されているところに、大きな意義を感じた。
- 2 「きくこと」と「つくること」というテーマに創造性との結びつきがよく出て

いる。

3 歴史的な手法が中心であるが、後半の音楽的分析に関して、従来の西洋音楽的・楽式的な分析ではなく、「反復」などの新たな視点からの音楽分析がユニークであった。

4 これまでの日本の音楽教育史研究では個人に焦点をあてたものはほとんどなかったが、一宮という個人について論述しつつ、そこから音楽教育史全体を見渡すという手法にオリジナリティがあった。

〈結論〉

研究方法の綿密さ、視点の独自性、結論の妥当性、新たな歴史観への可能性など、本研究は学位論文としての条件を十分に満たしており、日本の音楽教育史における新たな道筋を示した研究として高く評価することができ、全員一致で博士（学術）授与に値すると判断した。